

成果報告書

I. 研究概要

氏名	デディ・ステディ
所属	インドネシア教育大学言語芸術教育学部日本語教育学科
招聘回（招聘期間）	第8回、2013年10月1日～2014年3月31日
招聘研究テーマ	日本語の受動文とインドネシア語の受動文との対照研究
研究目的	本研究では、日本語の受動文の構文、意味・機能を分析・記述し、さらに、インドネシア語の受動文の構文と比較し、それぞれの類似点・相違点を明らかにすることを目的とする。両言語における受動文の類似点と相違点がわかることで、インドネシア人日本語学習者にとって、やさしい項目と難しい項目とがはっきり区別できるようになる。また、これまで教師があまり説明できない受動文の項目や、教科書に載っていない項目、教える順番などを改善できると考えられる。

研究概要：

日本語の受動文を、統語的機能、統語的範疇、意味役割という観点から再分類した結果、19のタイプに分類できた。まず、述語の種類から、大まかに、「他動詞述語」、「二重他動詞述語」、「自動詞述語」の三つにわけた。次に、それぞれを、直接受動文と間接受動文に分け、最終的に、主語の有・無情物や、動詞自体の意味などによって、次のように分けた。

- (1) 他動詞述語の直接受動文：タイプ①～⑧
- (2) 他動詞述語の間接受動文：タイプ⑨と⑩
- (3) 二重他動詞述語の直接受動文：タイプ⑪～⑬
- (4) 二重他動詞述語の間接受動文：タイプ⑭
- (5) 自動詞述語の受動文（間接受動文）：タイプ⑮～⑲

次に、インドネシア語の受動文を、同じ観点（統語的機能・統語的範疇・意味役割という観点）から再分類した結果、次のように分類した。

- a. 「di-動詞構文」：タイプ A-1～A-13
- b. 「ゼロ動詞構文」：タイプ B-1～B-3
- c. 「ter-動詞構文」：タイプ C-1 と C-2
- d. 「ke-|-an 構文」：タイプ D-1 と D-2
- e. 「kena-構文」：タイプ E-1 と E-2

両言語における受動文を対照した結果、次のようなことがわかった。まず、日本語の各タイプの受動文を、インドネシア語で表現することによって、対応するものもあり、対応していないものもある。その中で、「一致」したり、「分裂」になったり、「融合」したり、「欠如」したり、「新規」になったりするものもある。

- 1) 一致しているものは、タイプ①～⑧＝タイプ A-1～A-8、タイプ⑪～⑬＝タイプ A-10～A-12 である。
- 2) 分裂するものは、タイプ⑨→タイプ A-1 と C-1、タイプ⑮a→タイプ C-1 と E-1 である。
- 3) 融合しているものは、タイプ⑮b と⑰→タイプ A-13 である。
- 4) 欠如か新規になっているものは、タイプ⑩、⑭、⑯、⑱である。これらのタイプは、インドネシア人日本語学習者にとって難しい項目だと考えられる。

次に、インドネシア語の各タイプの受動文を日本語で表現することによって、対応するものもあり、対応していないものもある。その中で、「一致」したり、「分裂」したり、「融合」したり、「欠如」したり、「新規」になったりするものもある。

- 1) 一致しているものは、タイプ A-1~A-8=タイプ①~⑧、タイプ A-10~A-12=タイプ⑪~⑬=である。
- 2) 分裂するものは、タイプ C-1→タイプ①と⑨、タイプ A-13→⑮b と⑰である。
- 3) 融合しているものは、部分的にタイプ A-1 と E-1 である。
- 4) 欠如や新規になっているものは、タイプ B-1~B-3、タイプ C-2 と D-2 である。これらのタイプがあるから、日本語の受動文についての誤用が起こった原因だと考えられる。

それから、インドネシア人にどのような順番で教えるべきかを検討した結果、次のようなシラバス案を考えた。

- a. 一回目の授業では、タイプ①、⑧、⑦、②、③、④、⑤、⑥という順番で導入する。
- b. 二回目の授業では、タイプ⑪、⑫、⑬という順番である。
- c. 三回目の授業では、タイプ⑨、⑩、⑭という順番である。
- d. 四回目の授業では、タイプ⑮a、⑮b、⑰、⑮c、⑯、⑱という順番である。

本研究では、統語的機能、統語的範疇、意味役割という観点から分析してきた。つまり、統語論と意味論の一部の観点から分析を行った。今後の課題として次のようなことが考えられる。

1. 受動文の動作主(NP2)の助詞(マーカー)として、「に・によって・から・で」などについて研究を進めていく。
2. 受動文の述語の動詞のタイプ、すなわち、「能動詞・所動詞」について、研究を進めていく。
3. コミュニケーションで、もっと役立てるように、語用論の観点から、受動文を分析していく。

展望：

本研究の成果、特に、「インドネシア人向けの日本語の受動文のシラバス案」を、インドネシア教育大学における「文法の教材」として、作成していく。

インドネシア人日本語教師のための参考書・説明書として、本研究の結果を出版を目指す。

成果報告書

II. 研究成果論文

(別の PDF ファイルで送る)